

平成28年度 第3回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 平成28年11月2日（水）15時00分～16時00分
- 2 場 所 岐阜市役所本庁舎低層部4階 第1委員会室
- 3 出席者 細江市長、川島委員、中島委員、足立委員、武藤委員、横山委員
早川教育長 （※会議構成員全員が出席）
- 5 傍 聴 一般4名、報道関係者1名 （※公開で開催）
- 6 次 第 (1) 市長あいさつ
(2) 協議
(3) その他

7 議 事

(15時00分開会)

○事務局 只今から平成28年度第3回岐阜市総合教育会議を開会します。本日は、市長、教育長及び教育委員会委員5名全員が出席されております。本日の会議は公開で行います。傍聴者は一般の方が4名、報道機関の方が1名でございます。それでは次第に沿って進めてまいります。まずは市長から挨拶をお願いします。

○細江市長 今年度3回目の総合教育会議となります。まず、来年はご存知のように「織田信長公岐阜入城・岐阜命名450年」という節目の年であり、450（よんごーまる）プロジェクトと銘打って既に様々な取組みを始めていますが、私自身が子どもの頃のことを振り返ってみますと、「楽市楽座」が岐阜で行われたと学校で習った覚えがありませんでした。教育長に確認してもらったところ、「楽市楽座」が岐阜で行われたとの記載のある教科書は1社だけでした。そこで、その他の5社の教科書会社に連絡したところ、1社からは次回の教科書改訂時に修正するとの回答をいただき、また、もう1社からは岐阜市歴史博物館の見学に伺いたいといった反応をいただきました。これは教科書の粗探しということではなく、信長公の政策として有名な「楽市楽座」は岐阜から始まったものであると子どもたちが知ることで、郷土愛の醸成にもつながると思っています。

また、新しい大学入試制度の開始に向けて、学校で教えること、あるいは塾で教えることが変わっていくと思います。私がかねてから、日本のように大学に入る時の学力でその後が決まってしまうような仕組みに疑問を感じています。かつて10年間住んでいたアメリカでは、大学に入ることは簡単ですが、なかなか卒業することができません。日本とは異なり、大学においても能力を高めるための更なる努力が必要となります。

英語教育につきましては、岐阜市では平成16年度から小学校3年生以上で教科化しておりますが、国においては、4年後の平成32年度に小学校5、6年生で教科化される予定です。現在、インターネットを使って世界中にある情報を検索できますが、その際も、英語で表記された情報は多くありますし、さらには、年間2,000万人以上の外国人旅行者が来日する時代ですので、英語でのコミュニケーション力も大変重要です。

岐阜市における英語教育の課題は、小学校での6年間の英語教育が中学校において十分に活かされるよう学習内容を検討する必要があるということです。

また、先述しました大学入試制度改革にも関連しますが、「アクティブ・ラーニング」といって、他者と協力して課題発見、課題解決していくことが重要視されています。これまで、記憶することが重視されてきた日本の教育において、それだけではなく、記憶したことをベースにして物事を考える力を子どもたちに習得させることが必要です。

第4次産業革命と言われ、IoT（Internet of Things）やAI（Artificial Intelligence）などが話題となっていますが、これらの急速な技術の進展に、今の子どもたちがしっかりとついていって欲しいと思います。そのための基礎的能力を小中学校で習得させることも大切であると思います。

現在、ベネッセ教育総合研究所とは英語分野で取組みを進めさせていただいていますが、その他の様々な分野においても「エビデンスに基づく教育」を実証していきたいと思います。そのためには、この取組みを支えていただく先生にご理解をいただくことも必要です。そういったことも含めてご議論いただきたいと思います。

○事務局 ありがとうございます。次第2の協議へと移らせていただきます。事務局よりご説明させていただいた後に、委員の皆様よりご意見やご提案などをいただきたいと思います。それでは、事務局よりご説明申し上げます。

（説明略）

○事務局 ご意見をお伺いしたいと思います。いかがでしょうか。

○細江市長 GTEC（Global Test of English Communication）に関して、スコア帯の数値は何を指すのでしょうか。

○事務局 参考資料に、グレード1から7までのスコア帯を記載していますが、各グレードの範囲を示しています。

○細江市長 今回GTECで測定した市内の中学校2年生のレベルが全国と比較した場合にどの程度であるのかということをお改め教えてください。

○事務局 その他、ご意見やご提案等ありますでしょうか。

○細江市長 小中一貫の英語教育の現状について報告いただいておりますが、岐阜市独自の小中一貫した英語のカリキュラムを作ることは可能でしょうか。例えば、小学校でアルファベットを教えるとしたら、中学校ではアルファベットを教える必要が無くなると思います。

○**事務局** カリキュラムの作成は可能です。英語科では学習指導要領において、学年ごとの目標ではなく、3年間全体の目標が示されていますので、現在中学校2年生で学習している内容を中学校1年生で実施することも可能です。

○**細江市長** 小学校での「読む・書く」の導入も含めて、ぜひ小中一貫の英語のカリキュラムについて、来年度研究していただきたい。

○**早川教育長** 小学校ではあまり行っていない「書く」活動について、GTECの結果では、中学校における「書く」部分の評価が高いのはなぜでしょうか。

○**事務局** 中学校の授業において、ライティングにはかなり力を入れていることが影響しているかもしれません。

○**川島委員** 中間・期末の定期考査が「読む・書く」中心の内容であることが関係していると思います。

○**武藤委員** 定期考査の具体的な内容について、現状を教えてください。

○**事務局** リスニングは定期考査で実施していますが、スピーキングについては、定期考査ではなく、単元の終わりなどに実施しています。教師と生徒が一人ずつ対面する形で行っていますが、生徒が即興的に答えるものではなく、予め準備した内容を話すことが多いのが現状です。

○**横山委員** ベネッセ教育総合研究所との共同研究において、ターゲットを中学生とした理由を教えてください。

○**事務局** 小学校における早期英語教育の優位性を中学校で十分には活かしきれていないのではないかという課題認識も含めて、中学校英語の課題を明らかにすることで、小学校英語の改善・改良にもつながると考えています。

○**横山委員** GTECの結果を見ますと、小学校英語で力を入れているはずの「話す」の評価が低いことが明らかになっていますが、これは、小学校英語を見直すことを示唆しているのでしょうか。今後、この共同研究をどのように展開していく予定でしょうか。

○**事務局** まずは中学校英語における実態把握、課題分析を進めていきます。さらには、小中一貫したカリキュラムの整備を見据えて、小学校英語についても見つけ直していく予定です。

○細江市長 私は時々小学校へ行って英語の授業を見ていますが、ネイティブスピーカーと子どもたちとの会話はとても弾んでいます。このGTECの評価を見ていますと、意見を述べたり、結果をまとめたりといった部分は英語力以前の国語力を問われているように思います。

岐阜市において、小学校英語を推進する理由の一つは、英語に対する苦手意識を持たせないことです。子どもたちはとても楽しく取組んでいてくれますので、気軽に話したり、道を尋ねられた時に答えたりすることなどは十分できると思います。

一方で、このGTECでは問われている力が異なるのではないかと思います。GTECに対応した能力を習得させたいということであれば、小学校におけるスピーキングもGTECの内容を意識した内容にする必要があります。

○横山委員 GTECはあくまでも一つの物差しに過ぎないと思いますが、学習内容をその物差しに合わせるということですか。

○細江市長 GTECを評価し、一つの指標と捉えて共同研究を進めていくのであれば、その指標を踏まえた学習をする必要があるということです。

○川島委員 絶対値としてのスコアはもちろん重要ですが、現状のスコアをどのように分析し、伸ばしていくのかということが重要であると思います。そのために必要な指導や助言をしていただくのがベネッセ教育総合研究所であり、その核となる考え方がエビデンスベーストであろうと思います。常日頃から経験や勘などに過度に頼らない知見やデータに基づいた客観的な分析を利用したPDCAサイクルとして、エビデンスに基づいた目標・計画を作成し、それを実践し、チェックをして更に改善していくという仕組みを確立していくことが、ベネッセ教育総合研究所と連携した共同研究の意義であると理解しています。

また、市長にご報告ですが、先日、東海北陸6県の市町村教育委員会連合会に岐阜県の教育委員会の代表として参加し、参加者の皆さまに向けて、岐阜市における「エビデンスに基づく教育」、ベネッセ教育総合研究所との連携、先進的な英語教育などについてご紹介したところ、非常に先進的な取り組みであることや、この総合教育会議での具体的で活発な議論について、高く評価していただきました。

○足立委員 スピーキングに関連しますが、私たちが社会に出て一番感じることは、英語でのプレゼンテーションができていないということです。それは英語力だけの問題ではなく、日本語でもそのような訓練をする機会が多くはありませんし、そういった教育を受けてこなかったと思います。まずは日本語で、みんなの前でプレゼンテーションをする訓練が必要であると思います。その土台があつての英語でのスピーキングであると思います。小学校では英語に慣れるところから始めるとよいと思いますが、中学校においてはスピーキング力を高めていくことが非常に重要

であると思います。

○中島委員 中学校の英語の先生向けには研修が実施されていますので、今後は、小学校の先生向けの研修も必要であろうと思います。

また、先ほどの市長の発言にもありましたが、子どもたちが苦手意識を持つことがないように取組みを進めていただきたいと思います。そのためにも、何らかの学ぶ目的があるとよいと思います。英語と料理や、英語と様々なアクティビティがセットになっていると、それらの活動を通して、自然と英語を学ぶこともできると思います。

○事務局 様々なご意見をいただきまして、ありがとうございます。

それでは次に、アクティブシニアと子どもたちをつなぐ施策について議論させていただきたいと思います。

○細江市長 現在、元気な高齢者が増えています。そこで、元気な高齢者と子どもたちをつなぐことを来年度、調査・研究していきたいと考えています。この高齢者と子どもたちの接点づくりには、二つの取組みがあります。

一つは、教育委員会としての視点から、教員OBなど、教育者と子どもたちをつなぐ取組みであり、もう一つは、教員等の経験がない高齢者が人生の先輩として、様々な知識や経験を子どもたちに伝える取組みです。現在、シニア世代の活性化や生涯学習の振興として岐阜市では長良川大学を開講していますが、過去には1,500講座程度、現在も1,000講座程度があり、この講座の受講者と子どもたちをつなげる取組みもよいと思います。

このように、高齢者が子どもたちと接することで、生きがいを持ったり元気になったりするとともに、子どもたちが人生の先輩である高齢者から色々と学ぶための接点づくりについて、来年度、考えていきたいと思います。ご意見等がありましたら参考にさせていただきたいと思います。

○横山委員 現在の少子高齢化という社会構造を逆手にとって利用するという施策の方向性はとてもよいと思います。ただし、主は学校教育であることを念頭に置いたうえで、この取組みを進めていくべきであると思います。

やる気があって、生きがいを求める高齢者は多くいらっしゃると思いますので、その力を使わない手はないと思います。予算をかけなくても、例えば、市独自の資格を付与するなど、高齢者のやる気を引き出す方法はたくさんあると思います。

○川島委員 岐阜市では、全小中・特別支援学校においてコミュニティ・スクールが導入されている中で、コミュニティ・スクールの担うべき役割が明確になってきたと思います。これまでは、学校行事の中で貢献することが多かったのですが、地域の方々の様々なスキ

ルをコミュニティ・スクールの枠組みの中で活用する方法を考えていきたいと思います。

昨年度まで、私は中学校のコミュニティ・スクールのメンバーでしたので、そこでの気づきについてお話をさせていただきますと、中学校は複数の小学校が一緒になりますが、それぞれの小学校でのコミュニティ・スクールには違いがありますので、中学校におけるコミュニティ・スクールの担い手につきましては、まだ未整備の部分があると思います。岐阜市において、コミュニティ・スクールが全校で導入されて、まだ1年ですので、現場では試行錯誤を繰り返しています。そういった点でも、行政からの支援によってコミュニティ・スクールの機能がより充実したものになるとよいと思います。

○細江市長 コミュニティ・スクールなど、学校教育に関わる部分は教育委員会が主導的に担っていくとよいと思います。また、長良川大学は市民参画部が所管していきまして、生涯学習の観点から、高齢者と子どもたちをつなぐ取組みについては、市民参画部が対応していくということで考えています。

委員の皆様から具体的な施策をご提案いただけるとありがたいです。

○川島委員 一つお願いになりますが、自治会連合会とコミュニティ・スクールの担う役割が重複しているところがあります。既存の役割を研究し、整理しながら新たな施策を推進していただきたいと思います。

○足立委員 認知症サポーターの養成制度がありますが、岐阜市でもその養成講座を受けた方には地域の認知症サポーターになっていただいています。地域の皆さんで認知症の方を支えていくという取組みができています。

○武藤委員 自己啓発として多様な活動をされているシニアの方がたくさんいらっしゃると思います。その方々をどのようにして子どもたちにつなげていくかということについては、工夫が必要であると思います。例えば、親が子どもの通う学校へ行くのと同様に、祖父母が孫の通う学校へ行くなど、身近なことから始めて、少しずつ学校との関わりを持ってもらえるとよいと思います。制度、仕組みを作るだけでなく、この取組みを広げていくための様々な仕掛けを検討していただきたいと思います。

○中島委員 とてもよい取組みであると思います。ただ、市の様々な部局から個別に学校へアプローチされると現場が混乱すると思いますので、例えば、資料で示されている拠点の中にコーディネーターを配置して、その方を通して学校とは協議・調整をすることが必要であると思います。また、子どもたちに関する取組みですので、企業も積極的に参画していただけるのではないかと思います。

○**川島委員** 高齢者向けの筋トレ教室を開催していきまして、毎回約 40 名の方にご参加いただいておりますが、この活動を通しての実感は、指導者を支えることが結構大変だということです。

○**細江市長** 委員提出資料でご指摘いただいておりますが、高齢者の自己満足に終わらないことが大切であると思います。

○**事務局** その他、ご意見等ございましたら宜しく申し上げます。

○**細江市長** 是非、小中一貫の英語のカリキュラムを作って欲しいと思います。例えば、小学校 1・2 年生で発音記号やアルファベットを教えるなど、是非考えてください。

○**事務局** ありがとうございました。本日の協議を踏まえまして、今年度の取組みをさらに進めていくとともに、来年度の施策につなげていきたいと思っております。それでは本日の会議を終了したいと思います。

(16時00分閉会)